

刊本蘭日辞書の見出し語配列について

櫻井 豪人

要旨

江戸時代後期に刊行された蘭日辞書である『波留麻和解』『訳鍵』『和蘭字彙』『増補改正訳鍵』の見出し語配列方法は、現代のアルファベット引き西洋語辞書の配列方法とは異なる面があり、場合によっては探している語がなかなか見つけられないことがある。本稿は、それらの蘭日辞書の源となったハルマ蘭仏辞典第2版に遡って見出し語配列方法を分析した上で、それらの蘭日辞書が現代の辞書の見出し語配列方法とどのように異なるのかについて具体的に明らかにする。

1. はじめに

江戸時代後期に刊行された蘭日辞書のうち、A～Zまで完結したものとしては、江戸ハルマ系統の稲村三伯ら編『波留麻和解』（寛政八1796年刊）、藤林普山編『訳鍵』（文化七1810年刊）、広田憲寛編『増補改正訳鍵』（安政四～万延元1857-60年刊）と、長崎ハルマ（『ドーフ・ハルマ』）系統の桂川甫周梓『和蘭字彙』（安政二～五1855-58年刊）がある。これらは日本語史研究でもよく用いられる蘭日辞書であるが、オランダ語から語を検索しようとする際に、目的とする語がなかなか見つけられない場合がある。

見出し語がアルファベット順で配列されている辞書を引く際、現代の辞書に慣れている我々は、目的とする見出し語があるべき場所になければ、その見出し語が収録されていないものと理解する。しかし、近世の蘭日辞書では、様々な要因により、現代の我々が考えるアルファベット順配列とは異なる場所に語の存在することがある。本稿は、上記の刊本蘭日辞書をオランダ語から検索する際に直面する様々な問題と、その主な原因を示すものである。

2. 西洋語の辞書におけるI・JおよびU・V・Wの扱い

現代のアルファベット引き辞書の見出し語は、現在定められている正書法に基づいてアルファベット順で配列されている。しかし、日本の江戸時代に相当する17世紀から19世紀前

半には西洋諸語においてまだ綴り方が定まっていない場合が多く、それゆえ辞書の見出し語配列も現代とは異なる場合が少なくない。そのことは、時代によって、あるいは辞書によって配列方法が異なるということだけではなく、一つの辞書の中においても、必ずしも統一的な綴り字規則によって配列されていないという現象を生じさせている。

それゆえ、江戸時代の蘭日辞書でも以下に示すような綴りの揺れが存在するので、見つけれない場合でも別の綴りで検索してみる必要がある。(『和蘭字彙』の場合、拙稿2011。)

- ・母音の綴り：haren/haalen、vegen/veegen、wonen/woonen、haarlok/hairlok、aarzelen/aerzelen、kunst/konst、oprigten/opregtenなど。
- ・子音の綴り：ambtenaar/amptenaar、hechten/hegten、kazemat/casemate、bekwaam/bequaam、kiesch/kies、etsen/etzen、krakeel/krakkeelなど。
- ・その他：weder…/weêr…、neérhalen/nederhaalenなど。

しかし、I・JとU・V・Wの扱いについては、そういったこととは別のレベルで、辞書ごとに扱いが異なる。J・U・Wの三文字は、ラテン語で使用する文字の中にもともと存在しておらず、JはIから、UとWはそれぞれVから、後になって派生したという経緯を持つ。その経緯により、江戸時代に日本に伝来した西洋語のアルファベット引き辞書も、時代の古いものほどそれらを区別せずに配列する傾向にある。区別せずに配列するとは、例えばIとJなら、maidの後にmajesticが来て、さらにその後にはmailが続くというように配列することである。すなわち、IとJについて表記上の区別はするが、配列の上では区別しないということである。オランダ語の辞書ではないが、日本でも幕末期に用いられたW.H.Medhurstの英華字典*English and Chinese Dictionary* (1847-48年上海刊)においても、IとJは区別されずに配列されている。(U・V・Wは区別されている。)一方、それに先んじるR.Morrisonによる英華字典*A Dictionary of the Chinese Language, Part III* (1822年ロンドン刊)は、現代の辞書と同様、I・J・U・V・Wを全て区別して配列している。

この点について、本稿で対象とする蘭日辞書は以下のような扱いをしている。(江戸ハルマと長崎ハルマの底本とされるハルマF.Halma蘭仏辞典*Woordenboek der Nederduitsche en Fransche Taalen*第2版 (1729年オランダ刊、以下「ハルマ2版」と略記)についても示す。なお、Wについてはいずれの辞書も区別しているので、これ以降扱わない。)

ハルマ2版 (1729)²・『波留麻和解』(1796)・『訳鍵』(1810)

I・J→区別せず配列、「J. I.」の部(『訳鍵』は「IJ」の部)

U・V→区別せず配列、「U. V.」の部

『和蘭字彙』(1855-58)・『増補改正訳鍵』(1857-60)

I・J→区別して配列(『増補改正訳鍵』は場所による)、「I.」の部の次に「J.」の部

U・V→区別して配列(『増補改正訳鍵』は場所による)、「U.」の部の次に「V.」の部

すなわち、ハルマ2版ではIとJおよびUとVを区別せずに配列しており、江戸ハルマと呼ばれる『波留麻和解』と、その簡略版の『訳鍵』はハルマ2版の配列方法を受け継いでいることになる。

一方、『和蘭字彙』は、同じハルマ2版を底本としながらもその配列方法を取らず、IとJ、UとVをそれぞれ区別して配列している。

その理由は『ドゥーフ・ハルマ』(1816-33年成)の序文に記されている。『和蘭字彙』は、長年写本として流布してきた『ドゥーフ・ハルマ』を桂川甫周(国興)が翻刻・出版した蘭日辞書である。『ドゥーフ・ハルマ』は、阿蘭陀商館長ドゥーフHendrik Doeffが長崎の阿蘭陀通詞たちの協力を得つつハルマ2版を日本語に訳して蘭日対訳にした辞書なので、現在そのように呼ばれている。『和蘭字彙』には『ドゥーフ・ハルマ』の成立の経緯についてさほど詳しく書かれていないが、『ドゥーフ・ハルマ』の一部の写本に付されているドゥーフによる蘭文序(1816年)と、それを阿蘭陀通詞たちが訳した和文序(「緒言」)には成立事情が詳細に記されている。その中でドゥーフは以下のように述べている。(早稲田大学図書館蔵・坪井信道旧蔵『道訳法兒馬』の「緒言」による。誤字の類は修正した。)

一此辞書は本フランソイスハルマの著述せる辞書の第二版の本に就て撰すといへとも全くハルマを用ふるにあらず其運用の例において不用なるものは是をすて緊要なる物は更に増し加ふ_アアベセの序次はハルマの所例に随はず常に用ふる所の次第によれり即
abcdefghijklmnopqrstuvwxyzの如し

この記述の通り、『ドゥーフ・ハルマ』(長崎ハルマ)はハルマ2版の配列方法によらず、IとJ、UとVをそれぞれ区別して語を配列している。ドゥーフ自筆と目されるローマ字本の『ドゥーフ・ハルマ』初稿(高知県立高知追手前高等学校蔵、松田清1984,86参照)において既にそのようになっているところを見ると、この配列方針は『和蘭字彙』を含めた全ての『ドゥーフ・ハルマ』諸本に共通しているものと見られ、江戸ハルマ系統の『波留麻和解』や『訳鍵』と大きく異なる点の一つと言える。

同じく江戸ハルマ系統の『増補改正訳鍵』は、『訳鍵』に対して『和蘭字彙』を用いて増補・改正を施した辞書であるが、Iの部とJの部、Uの部とVの部を分けていることから察するに、『訳鍵』の配列方法は取らず、『和蘭字彙』の配列方法に従ったものとひとまずは言えそうに見える。しかし、中身を見てみると、配列方法の異なる二つの先行辞書に拠っていないがそれをきちんと整理しなかったために、一元的な配列方法になっていない(後述)。

3. オランダ語の辞書におけるIJとYの扱い

上記のことに加えて、オランダ語のアルファベット引き辞書には、IJ(ij)とY(y)の綴りの問題が存在する。IJ(ij)という綴りは西洋語の中でもオランダ語特有の綴りで、もともとはii[i:]という長母音だったものに対し、後の方のiがjと綴るようになったために生じた綴りである。これが後に[eɪ]という発音になったのであるが、特に筆記体で綴った際にijはyとよく似ているので、両者は区別されなくなり、本来はIJ(ij)で綴るべきところをY(y)でも綴

ることが常態化してしまった³。つまり、yはもともとオランダ語を綴る際に用いられる文字ではなく、外来語を綴る際に用いられる程度の文字であったものが、ijと混同されて、ijとyのどちらにも綴られるようになったのである。しかし、アルファベット順で見出し語が配列されているオランダ語の辞書においては、その配列位置をhの後とするのか、あるいはxの後とするのかで、配列順がかなり違ってくる。

先に示した5つの辞書、すなわちハルマ2版・『波留麻和解』・『訳鍵』・『増補改正訳鍵』・『和蘭字彙』は、いずれもYの部を持つ。しかし扱いは異なり、ハルマ2版とそれに拠った『波留麻和解』においてYの部にある語は、Yの字の説明の見出しと、カラ見出しのみである。(カラ見出しとは、語釈の位置にただ「zie…」(…の項を見よ)とのみ記されている見出し語のことである。ただし、『波留麻和解』はハルマ2版でカラ見出しとなっている見出し語にも訳語を示すので、実質的にはカラ見出しになっていない。)

それに対し、『和蘭字彙』やその配列方法に倣った『増補改正訳鍵』は、Yの部にカラ見出し以外の語も入れている。例えばオランダ語のijs(ys)は英語のiceに相当する「氷」の意の語であるが、ハルマ2版は(カラ見出しを除いて)「J. I.」の部に入れているのに対し、『和蘭字彙』は「I.」の部に入れずに「Y.」の部のみに入れている。(『訳鍵』と『増補改正訳鍵』は両方の部に入れている。)

以上に述べたことは、アルファベット引きの辞書においてどの「部」に入れられているかという問題についての話であったが、全体の見出し語配列順についても同様のことが言える。例えば当時のオランダ語綴りのbije・bye(「蜂」の意、英語のbee)は、ハルマ2版ではBIJEと綴り、『波留麻和解』もbijeと綴って、ともにbijeの位置(すなわちbih…の後の位置)にあるのに対し、『和蘭字彙』はbyeの位置(すなわちbyd…の後の位置)にある⁴。

ならば、ハルマ2版と『波留麻和解』は、ijまたはyと綴る語を全てijにしているのかというとそうではない。例えば、「…の側に」の意味を表すbij(またはby、英語のbyと同じ語)は、ハルマ2版・『波留麻和解』・『訳鍵』ではいずれもbyと綴り、byの位置(すなわちbu…の後の位置)にある。そして、これが接頭辞となっている語、例えばbydoen(添える)やbyeen(…と一緒に)はby…の位置にあり、そうでないものの一部、例えばbijbel(聖書)やbije(蜂)はbij…の位置(すなわちbih…の後の位置)にある。ハルマ2版に見られるこのijとyの書き分けは当時の発音の相違によるものではなく、何らかの意図による書き分けと見られるが、少なくとも我々日本人にはその書き分けの区別がつかない。(たとえるなら日本語の古語における「い」「ひ」「ゐ」の書き分けのようなもので、ハルマ2版のこの書き分けも、日本語史でいう「定家仮名遣い」のような、必ずしも発音の相違によらない独自の書き分けであった可能性が高い。)一方、長崎ハルマ系統の『和蘭字彙』では全てyの位置にあるので、統一的な配列になっている。

なお、現代のオランダ語の正書法では、(一部の外来語を除いて)原則としてijで綴ることになっているので、その点は注意が必要である。すなわち、「…の側に」はbijと綴り、「蜂」も(現代ではeをつけずに)bijと綴る。

4. ハルマ蘭仏辞典第2版の見出し語配列方法

上に述べた通り、ハルマ2版はIとJおよびUとVを区別せずに配列し、Yは語によってIJに綴ったりYに綴ったりする。そしてその配列順は、見た目のアルファベット順の位置に、すなわちIで綴ればI・Jの位置に、Yで綴ればYの位置に配置するのが原則である。この原則は、後に示す刊本蘭日辞書の配列に比べれば概ねよく守られている。

しかしよく見ると、ハルマ2版にも見出し語がアルファベット順に並んでいないところが時折見られる。それは編集ミスによるものなどではなく、現代の辞書とは異なる検索システムを構築しているがゆえに、そもそも厳密なアルファベット順に配列することを目指していなかったものと見られる。以下、その検索システムについて、例を挙げつつ説明する。

ハルマ2版の検索システムは、見出し語が「三字見出し」「親見出し」「子見出し」³の三階層に分けて配列されている点に特徴がある（図版1）。「三字見出し」は見出し語の最初のアルファベット三文字を記したもので、ハルマ2版では全て大文字で記される。（一文字や二文字の場合もある。）この時代の多くの辞書では、各ページ、あるいは各段組みの一番上のところ（「柱」または「欄外見出し」）にこうした「三字見出し」のようなものを置いているが、ハルマ2版が特徴的なのは、上部欄外だけでなく、本文の途中にも「三字見出し」を組み込んでいる点である。つまり、本文全体が「三字見出し」で区切られていることになるのであるが、これはハルマ2版が、探している語の最初の三文字で、目的とする語の存在する範囲を明示するシステムとなっていることを意味する。正書法が定まっておらず、見出し語がアルファベット順に整然と並んでいる現代の辞書に慣れている我々にとってはこのように分ける理由がわかりにくい、正書法が定まっていない当時においてはそれなりの意味を持っていたものと考えられる。すなわち、目的とする語を探して行って、次の「三字見出し」に目的とする語の最初の三文字と違うものが来た時、そこから先には目的とする語が無いことを明示することになるのである。「三字見出し」が本文中に組み込まれていることには、そうした意図があったに違いない。

「三字見出し」の下位には「親見出し」が記される。「親見出し」は、字下げされずに全て大文字で綴られるという、表記上の卓立がなされている。その下に「子見出し」が、一～二文字ほど下げて頭文字のみ大文字で記されるが、「子見出し」には実に様々なものが含まれる。普通、国語辞典で「子見出し」に含まれるのは「親見出し」の語の成句の類が中心であろうが、ここでいうハルマ2版の「子見出し」には、例文、例句、親見出しの語の派生語（別品詞形など）や、その派生語を含む複合語など、様々なものが含まれる。本稿ではこれを一律に「子見出し」と呼ぶことにするが、それは字下げの位置が同じで頭文字のみ大文字で記されている点が共通しており、表記上の差異が認められないためである。（勿論、それが例文、例句、語の見出しのいずれなのかについては、内容を見れば一目瞭然ではある。）

図版1のEETBAAR（食べられる、食用の）という「親見出し」を例に取って見てみると、

EER.

mier lieu, que, &c.
Eerftgeboorne. z. m. en v. Die eerft geboren is. *Premier-né, aîné, aînée.*
Eerftgeboorte. z. v. *Aînéssé, priorité d'âge.*
 * **Regt van eerftgeboorte.** *Le droit d'aînéssé.*
Efau verkogt 't regt van zijn eerftgeboorte aan Jakob. *Efait vendit son droit d'aînéssé à Jacob.*
De eerftemaal, de eerfte reis. *La première fois.*
Iets voor de eerftemaal verfchoonen. *Pardonner quelque chose pour la première fois.*
Eerftkomende. byv. w. Naaftvolgende. *Prochain, prochaine, qui suit immédiatement.*
De eerftkomende week, maand, enz. *La semaine prochaine, le mois prochain, &c.*
EERTEKEN. z. g. *Marque d'honneur.*
EERTIJD. byv. Voortijds, voorheen. *Autrefois, jadis.*
Eertijds ging men anders gekleed. *Autrefois on étoit habillé d'une autre façon.*
Athene was certijds de hoofdstad van Griekenland. *Athènes étoit autrefois la première ville de la Grèce.*
EERTIJDTEL. zie Eernaam.
 * **Eettrap, Eerctrapp.** z. v. Trap der eeten. *Degré de gloire, ou d'honneur.*
Zy zijn op den hoogften eerctrapp geftegen. *Ils font montez au plus haut degré de la gloire.*
Eerwaardig. byv. w. Agtbaar. *Vénéralé, digne de respect, honoré, honorable.*
Eerwaardig vader, ten opzigt van de zoon. *Honoré Père.*
 * **Eerwaardige Vader, tegen een Monnik fprekende.** *Reverend Père.*
Een oud eerwaardig man. *Un vénérable vieillard.*
Eerwaardigheid. z. v. Aanzienlijkheid. *Dignité, mérite, importance.*
De eerwaardigheid der plaatze verbied zulks. *La dignité de lieu ne souffre pas cela.*
Eerwaardigheid. z. v. Een tijtel, dien men aan zommige Geestelijken, of Kerkelijke perfoonen geeft. *Révérence, titre qu'on donne à quelques Religieux, ou Ecclésiastiques.*
Uwe eerwaardigheid gelieve te wecten, dat, enz. *Votre Révérence s'us-ra, que, &c.*
Eerwaardiglijk. byv. Met grootte eer. *Respectueusement, avec grande révérence, avec grand respect.*
Hy wierd alom eerwaardiglijk ontfangen. *Il fut reçu par tout avec des marques de respect, ou d'honneur.*
Eerzaam. byv. w. zie Eerwaardig.
Eerzugt. z. v. Eerzugtigheid. *Ambition, desir d'honneur & de grandeur.*
Eerzugtig. byv. w. Eergicrig. *Ambitieux, qui a de l'ambition.*

EER. EES. EET. &c.

Een eerzugtig gemoed. *Un esprit ambitieux, une ame pleine d'ambition.*
Eerzugtigheid. zie Eerzugt.
Eerzuil. z. m. *Obelisque, colonne, monument élevé à l'honneur de quelcun.*

EES. EET.

EEST. z. m. De plaats alwaar debrouwers hun mout droogen. *Le lieu où les brasseurs sechent leur grain.*
EETBAAR. byv. w. Dat gegeten kan worden. *Mangeable, qu'on peut manger, ce qui est bon à manger.*
Dat is geen eetbare kost. *Cela n'est pas mangeable.*
Eeten. w. w. *Manger.*
Vleesch, visch, enz. eeten. *Manger de la viande, du poisson, &c.*
's Middags eeten. *Diner.*
's Avonds eeten. *Souper.*
Mijn Heer eet 's avonds niet. *Monseigneur ne soupe jamais ou ne mange pas le soir.*
Voor den eeten. *Avant dîné, avant soupé.*
Na den eeten. *Après dîné, après soupé.*
Het middags eeten. Het middagmaal. *Le dîner.*
Het avondeten, het avondmaal. *Le souper.*
Het eeten. z. g. De spijze. *Le manger, ce qu'on mange.*
Het eeten gereed maaken. *Preparer, ou accommoder le manger.*
Eetenstijd. *Le tems de manger, le tems de repaître, le tems de la réfection.*
Eeter. z. m. Die sterk eet. *Mangeur, celui qui mange beaucoup.*
Hy is een sterk, of groot eeter. *C'est un grand mangeur.*
Eetkamer. zie Eetzaal.
Eetkosten. zie Eetwaren.
Eetluft. z. v. Graagheid. *Appétit, envie de manger.*
Eetmaat. z. v. *Diète, régime de vivre.*
Eetster. z. v. *Mangeuse, celle qui mange beaucoup.*
Eettafel. z. v. *Table à manger.*
Eetplaats. zie Eetzaal.
Eetwaren. z. v. meerv. Al wat gegeten word. *Vivres, denrées, provisions de bouche.*
Daar verkooptmen alderhande eetwaren. *On vend la toute sorte de vivres.*
De eetwaren zijn duur, zijn goedkoop, enz. *Les vivres sont chers; sont à bon marché, &c.*
Eetzaal. z. v. *Salé ou chambre à manger.*

E E U.

EEUW, Eeuwe. z. v. De tijd van hondert jaaren. *Siècle, espace de cent ans.*
Na verloop van eene eeuwe. *Après l'espace de cent ans, ou d'un siècle.*
Eeuwig. In de Philosophische naaukeurigheid. byv. w. Dar begin nog eind heeft. *Eternel, qui n'a ni commencement ni fin, qui est & qui sera de toute éternité.*

EEU. EFF 161

God is alleen eeuwig. *Dieu seul est éternel.*
Eeuwig. Dar geen eind heeft. *Eternel, qui n'a point de fin.*
Het eeuwige goed zoeken. *Chercher les biens éternels.*
Het eeuwige leven. *La vie éternelle.*
De eeuwige zaligheid hangt 'er aan. *Le salut éternel en dépend.*
De eeuwige dood; de eeuwige verdooemenis. *La mort éternelle; la damnation éternelle.*
 * **Eeuwig, zeer lang, steeds.** *Toujours, fort longtems.*
Ach! riep hy, zal ik eeuwig klaagen, en eeuwig ongelukkig zijn. *Ah! s'écria-t'il, me plaindrai-je toujours, & serai-je toujours malheureux.*
Ter eeuwiger gedagtenisse. *En éternelle mémoire.*
Men heeft dat beeld ter eeuwiger gedagtenisse van den Koning opgerecht. *On a érigé cette statue à l'immortelle mémoire du Roi.*
Eeuwigdurend. byv. w. Dat altoos duurt. *Perpétuel, d'éternelle durée, stable, permanent.*
De hemelische goederen zijn eeuwigdurend. *Les biens célestes sont stables, ou permanents.*
Eeuwigheid. z. v. *Eternité.*
Van alle eeuwigheid. *De toute éternité.*
Tot in alle eeuwigheid leeven. *Vivre éternellement.*
Eeuwiglijk. byv. *Zonder einde. Eternellement, à jamais, sans fin.*
Eeuwspelen. z. g. meerv. *Spelen die op 't einde van ieder eeuw aangeregt worden.* *Jeux scolaires, jeux qui se font au commencement de chaque siècle.*

E F F.

EFFE. byv. w. *Gelijc, glad.* *Ras, uni, égal.*
Een effe stof, een stof zonder ruigte van wol. *Une étoffe rasé.*
Een effe stof; zonder bloemen, of goud of zilver. *Une étoffe unie.*
Een effe veld. *Une campagne rasé, une plaine unie.*
 * **Een effe tronie.** *Un visage posé; un visage qui ne marque aucune émotion intérieure.*
 * **Hy kan liegen met eene effe tronie.** *Il fait mentir sans se déconcerter, ou sans qu'il y parvienne.*
Een weg effen maaken. *Applanir un chemin.*
Effen. *Veressent.* *Régulé, ajusté.*
Nu zijn wy tot heden van alles effen. *Nous avons fondé nos comptes jusqu'à aujourd'hui.*
Een effen rekening. *Un compte réglé, un compte ajusté, ou fondé.*
 * **Een rekening effen stellen, of effen maaken.** *Sonder, terminer, régler, ou ajuster un compte.*
 * **Op een effen bodem staan; geen schuit.**

図版1 ハルマ蘭仏辞典第2版p.161 (家蔵本)

※上部欄外と本文中に「三字見出し」がある。中段にはEETBAARの「親見出し」があり、その下に「子見出し」が並ぶ。最初はDat is geen eetbare kost. (それは到底食せるものではない) の例文、次に動詞Eeten. (食べる) の見出し、さらにVreesch, visch, enz. eeten. (肉や魚などを食べる)、's Middags eeten. (昼食を取る) という例句が続く。中程のEetenstijd.以降、派生語や複合語が緩いアルファベット順で現れるが、その途中にも例文等が挟まれる。

Eeten (食べる) という動詞の基本形はその「子見出し」として現れる。現代の我々の感覚からすれば、Eetenも「親見出し」にしてよさそうな語であるが、そうっていない。ただ、検索の上では、EETBAARの次の「三字見出し」がEEU、「親見出し」がEEUWなので、そこまで視線が行けば、EETBAARとEEUWの間にEetenがあるはずだという推測が成り立つ。つまり、「親見出し」に選ばれる語は、最も基本的な語形 (例えば動詞の基本形) といった決め方ではなく、派生語や複合語を含めた語の集団の中で最もアルファベット順において早い綴りの語が選ばれるようである。(ただし、多くの動詞の基本形語尾は-enであり、eがアルファベット順の中で早いため、「親見出し」になることが多いのは確かである。)

この検索システムのため、「親見出し」同士では整然としたアルファベット順になっているのであるが、「子見出し」同士は必ずしもそうっていない。EETBAARの下の「子見出し」について例文や例句を除いて記すと、Eeten. Eetenstijd. Eeter. Eetkamer. …と並んで行くが、Eettafel.の次はEetplaats. Eetwaaren.となっており、アルファベット順になっていないところが時折存在する。そもそも、例文や例句が語の見出しと同じ字下げで表示されているのであるから、アルファベット順に基づいて検索すること自体を妨げるような表示方式になっているとも言える。ハルマ2版が敢えてこのようなスタイルを取っている理由の一つには、正書法が定まっていなかったため統一的なアルファベット順に並べることができなかつたということもあるが、アルファベット順の齟齬のために逐一版を組み替えるという作業が不要になるという実務上の理由もあったかもしれない。

このようにハルマ2版は、「三字見出し」と「親見出し」によって範囲を限定すれば、「子見出し」の中は多少配列が乱れていても問題無く探せるであろうという発想で作られている。そうすることによって、「親見出し」同士でも、「親見出し」の下の「子見出し」同士でも、総体として概ねアルファベット順に並ぶように設計されているのである。

もう一例挙げよう。ハルマ2版で「卵」の意味のeiを引くと、「EI. Ey. z.g. meerv. Eyeren.」と出て来る (図版2)。この場合、EIが「親見出し」で、Eyはその「別綴り」として併記され、さらにEyerenがそれらの「複数形綴り」として併記されていることになる。この「親見出し」の下に「子見出し」が列記されていくが、例文や例句を除いた後半の単語の「子見出し」はEyerdoor. Eyerdrop. Eyerkoek. Eyerschaal. Eyerstruif.と記され、yで綴られているのに対し、その次の「親見出し」はEIGEN.で、以降Eigenaar. といったiで綴られる語が続いて行く。

EI. Ey. z. g. meerv. Eyeren. *Oeuf*,
Een dodei; een vuil ei. *Un œuf*
couvis.
Een flopei, een week gekookt ei.
Un œuf à la coque.
Een ei met twee dooyers. *Oeuf à double*
jaune, œuf qui a deux jaunes, ou
deux moyeux.
Een windei; een ei zonder schaal.
Un œuf sans coque.
Een netfei. *Oeuf couvis*.
De dooyer van een ei. *Jaune d'œuf*,
ou moyeu.
† Wit van een ei; eiwit. *Blanc d'œuf*.
‡ Hy is zoo vol ondeugt als een ei
vol zuivel, hy is heel ondeugend.
Il est le plus méchant homme du monde.
Eyeren uit den dop eten. *Manger du*
œufs à la coque.
Geroerde eyeren. *Oeufs frits, ou fri-*
caffés, œufs bouillés.
Eyerdoor. Dooyer van een ei. *Jaune*
d'œuf.
Eyerdrop. zie Eyerfchaal.
Eyerkoek. z. v. (Oncigentlijk een
Zuster genaamt.) *Gâteau aux œufs*
et au beurre.
Eyerfchaal. z. v. Eyerdrop. *Coque* &
coquille d'œuf.
Eyerftruij. z. v. *Omelette, amélette,*
ou aumelette.

E I G.

EIGEN. *byv. w. Dat elk in 't byzon-*
der raakt, of toekomt. Propre, ce
qui touche, ce qui concerne quelcun,
ce qui lui appartient, ce qui lui con-
vient.

図版2 ハルマ蘭日辞典第2版

EIの項以下 (家蔵本)

つまり、「親見出し」レベルでは見た目のアルファベット順で並んでいるが、「子見出し」レベルではそうとも限らず、「子見出し」の最後の語から次の「親見出し」の語に移る際には、その両者が必ずしも見た目のアルファベット順になっているとは限らないということである。近世の蘭日辞書の源となったハルマ2版の配列方法自体が、実はこのような曖昧な要素を含んでいるのであるが、大文字・小文字の区別と字下げを交えたこの「親見出し」・「子見出し」による配列方法は、それはそれで一つの合理的な検索システムとなっているように感じられる。すなわち、正書法の定まっていなかった当時の状況下で検索のしやすさを追求して生まれたのが、曖昧な要素を含むこの配列方法であったのではないかと解されるのである。

5. 『波留麻和解』の見出し語配列方法

『波留麻和解』の見出し語配列順は、基本的にハルマ2版のそれに拠っている。例文や一部の例句等は省略しているが、その省略した部分を除いて行けばほぼ『波留麻和解』の見出し語順と一致しているので、その点において両者の対照は容易である。

ただし、綴り方において全く同じかといえば、そうではない。一見してわかることから挙げれば、『波留麻和解』には大文字が全く見られず、全て小文字で示されている。それから、アポストロフ (') やサーカムフレックス (^) 等の記号も見られず、イタリックとローマンの違いも無い (図版3)。これらのことは恐らく、オランダ語部分を木活字で印刷するに際し、必要最小限の活字に抑えるために取られた措置だったのであろう⁶。

先に示した親見出し・子見出しの別は、『波留麻和解』にも一応継承されている。ただし、大文字の活字を作らなかったため、大文字・小文字の区別はされず、一〜二文字程度の字下げのみでそれを示そうとしている。それゆえ、特に子見出しが一丁以上延々と並んでいる箇所では、そこが子見出しであることに気がつきにくいという欠点がある。

また、ハルマ2版で「別綴り」として親見出しと同行に示されている綴りは、ハルマ2版と異なり、独自に改行して示していることがある。例えば、ハルマ2版には以下のような親見出しのカラ見出しがある。

BUCHEL, of Bucchel. zie Bochel.

オランダ語のofは英語のorに相当する語で、BUCHELの親見出しに対してBucchelという「別綴り」を示している。これが『波留麻和解』では以下のようにになっている。

buchel,脊虫. 又 瘤.

bucchel.同上

上の行は親見出しなので、字下げされていないのは当然であるが、本来なら同じ行に記されるべき「別綴り」は次の行に送られて、同様に字下げされずに示されている。つまり、bucchelも親見出しのように見えてしまうのであるが、アルファベット順であればbuchelよ

eerzigt. z. v.	同上
eerzuchtig.	同上
eerzuchtigheid.	同上
eerzucht. z. m.	建寺 建社
e e s.	
eest. z. m.	酒 飲 飲
e e t.	
eeibaar.	食 モノ
eeten. w. v.	食 フ
voort den eeten.	食 前
na den eeten.	食 後
het eeten.	食 物
eetenstijd.	食 時
eeter. z. m.	食 人
eetkamer.	食 室
eetkosten.	食 物 費
eetlust. z. v.	食 慾
eetmaat. z. v.	食 法
eetster. z. v.	多 食 婦 子
eettafel. z. v.	食 卓
eetplaats.	食 室
eetwaaren. z. v.	食 物
eetzal. z. v.	食 室
e e o.	
eeuw.	年 大 概 百
eeuwig.	恒 無 窮
eeuwig.	恒 無 窮
het eeuwige leven.	永 存 三 世
* eeuwig.	甚 長 久 遠
ter eeuwigen gedagtenisse.	永 念 之

図版3 『波留麻和解』 EF冊9ウ～10オ（東京大学総合図書館蔵本）

※『波留麻和解』の木活字は全て小文字のローマン体なので、「三字見出し」も「親見出し」も小文字である。左の丁の中程にeet.という「三字見出し」、その下にeeibaar.という「親見出し」があり、それ以下はeeibaar.の下の「子見出し」が一字下げで並んで行く。

りも前にあるべき語なので、現代の我々からすれば違和感を覚えるところである。訳語が単に「同上」とのみ記されている語の中の一部には、このようにハルマ2版の「別綴り」である場合があるが、この表記法はそのまま『訳鍵』や『増補改正訳鍵』にも引き継がれ、見出し語配列がアルファベット順になっていないと感じさせる要因の一つとなっている。

ijとyに関して言えば、ハルマ2版でijで綴られている語を時折『波留麻和解』が独自にyに変更しており、場合によっては見た目のアルファベット順が崩れてしまっている箇所がある。以下にその例を示す。（下線は櫻井による。以下同様。）

- ・ aayen. (次の語はaakなのでijの位置。ハルマ2版はAAIJEN。)
- ・ aanbeyen. (次の語はaanbelangなのでijの位置。ハルマ2版はAANBEIJEN。)
- ・ aanblyven. (次の語はaanblikなのでijの位置。ハルマ2版はAANBLIJVEN。)
- ・ accyskamer. (次の語はaccijsmeesterなのでijの位置。ハルマ2版はAccijskamer。)
- ・ artykel. (次の語はartikel briefなのでijの位置。ハルマ2版はARTIJKEL。)
- ・ azyinkan. (次の語はazijntonなのでijの位置。ハルマ2版はazijnkan。)

このように、『波留麻和解』ではハルマ2版のijをyに変更することがあるが、ハルマ2版の配列順や親見出し・子見出しの別は保存されているので、このことさえ知っていれば検索するのが難しくなっていると感じることはあまりない⁷。

6. 『訳鍵』の見出し語配列方法

『訳鍵』は『波留麻和解』の簡略版とよく言われるが、杉本1978 (p.697) も指摘するように単なる簡略版などではなく、独自に見出し語や訳語を増補・改変するなど⁸、『波留麻和解』には見られない記述や特徴も多く備えている。見出し語のアルファベット表記の方法についても、そのように言える部分がある。

6.1. 『訳鍵』における「…」による省略表記と親見出し・子見出しの別の廃止

見出し語表記の点において『訳鍵』が『波留麻和解』と大きく異なるのは、各見出し語の最初の三文字について、前の語と綴りが変わったタイミングで大文字表記し、前の語と変わらない場合は「…」といった記号で省略する表記法である。例えば、『訳鍵』の見出し語をAの部の冒頭から順に記せば、「A.」「AAF.」「…sch.」「AAGje.」「AAI!」「…jen.」となっているが、「…」のところにはそれぞれaafやaaiが入るという具合である。(三文字のところが多いが、中には「・」「…」など一～二文字の箇所や、四文字以上の箇所もある。これらはハルマ2版および『波留麻和解』の三字見出しと概ね一致するが、見出し語に増減があることも関係して、完全に一致するわけではない。)

この表記法の利点を強いて挙げれば、最初の三文字が大文字で大きく書かれているので、見やすく検索がしやすいということであろうか。あるいは、「…」を用いて省略することにより、各丁で使われるアルファベットの数が減るので、版下の作成や版木の彫刻の労力が多少軽減されるということもあったかもしれない。しかし、最初の三文字が同じである語がたくさん続く場合はかえって探しにくいという欠点⁹をはじめとして、以下に示すように多くの問題を生じさせている。

また、『波留麻和解』とは異なり、『訳鍵』は子見出しの字下げを一切行わない方針を取ったので、親見出しとの区別が無くなり、アルファベット順の齟齬が一気に増えた。そもそも『訳

...titul.	称	...ening	為ス 同テ
...waardig.	スル 道数	...entjes.	善 長 輕 健 長 長
...zaam.	同上	EETer.	即然
...zugt.	驕	EGA.	書 新 均 配
...zuil.	利柱	...de.	同上
EESr.	飲 酒 嗜	...al.	平 筆
EETen.	嗜 食	...jilfe.	守 言
...kosten.	食物	EGEl	豪 探
...maat.	食 食 陸	...dmaal.	ス 採 採
...tafel.	卓 子	EGGc	農 農
...plaats.	食 食	...er.	農 農
...waaren.	食物	...erig.	鈍 淡 味 同 上
...ftok.	箸	...ig.	心 鈍 鈍
...ftuk.	同上	...ing.	農 農 農
...zaal.	食 室	EGyptenaren.	久 分 多
EEUw.	百 生 涯	...pien.	ト 多
...wig.	無 分 久	EGT.	恰 真 法 相 應 婚
...wfpzellen.	遊 涯	...breeken.	ス 落 通
EEVenaar.	亦 道	...breuk.	落 通
EFFe.	平 滑	...e bed.	食 室
...en.	恰 相 算 合	...eman.	正 人 正 夫 配

図版4 『訳鍵』52才 (家蔵本)

※左側中央にEETen以下の見出し語がある。

鍵』では、アルファベット順になっていないような子見出し（例文や例句、前部要素に別の語が来るタイプの複合語など）を排除して作られてはいるのであるが、概ねアルファベット順になっている子見出しはほぼ『波留麻和解』の見出し語順のままを含めている。その場合に親見出しと子見出しを分けなくて示したために、利用者にとってみればアルファベット順になっていないと感じる箇所が増大した。先に示したeeten以下で見ると、EETen. …kosten. …maat. …tafel. …plaats. …waaren. …stok.といった具合にハルマ2版の子見出しの順番通りに並べているので、厳密なアルファベット順にはなっていない（52オ左、図版4）。そしてこの欠点は、同様に『増補改正訳鍵』にも引き継がれた。（ちなみに、最後の「eetstok.箸」は『訳鍵』で増補された語であるが、それによりeetwaarenもアルファベット順から外れた。）

6.2. 『訳鍵』の見出し語表記法の問題点

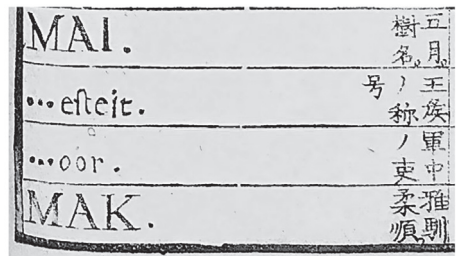
この「…」による略記法は、IとJ、UとVを区別して配列しないという配列方法と組み合わせ、以下ような問題を引き起こしている。例えば、『訳鍵』138オ左に以下のような4語の並びがある（図版5）。

MAI.五月。樹名。
 …esteit.王侯ノ称号
 …oor.軍中ノ吏
 MAK.雅順 柔順。

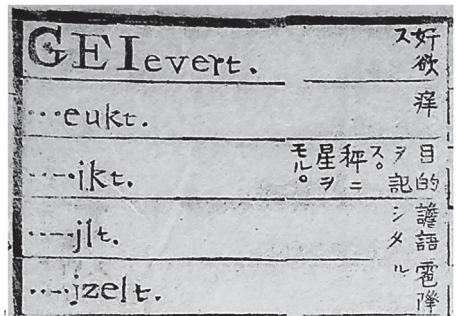
ここでの「…」で省略されているのはmaiであるように見えるが、正しくはmajである。ハルマ2版や『波留麻和解』では省略されずに記されているので、それらを参照すればわかるが、参照しなければわかりにくい。このような例は決して頻繁に見られるわけではないが、ごく例外的というわけでもない。以下にもう一例掲げる（63ウ左、図版6）。

GEIvert.好欲ス
 …eukt.痒
 …jkt.目的ヲ記ス。秤ニ星ヲモル。
 …jlt.謔語シタ
 …jzelt.雹降ル

上の例では、2番目の語のみ三文字目がjでgejeukt、それ以外の語はiである。さらにこの箇所の場合、下の3語の書き方が、「…」となっていて非常にわかりにくい。ハルマ2版ではGE-IJKT・GE-IJLT・GE-IJZELTとなっているので、それぞれge-ijkt・ge-ijlt・ge-ijzeltという綴りを意図していることになる¹⁰。



図版5 『訳鍵』138オ左（家蔵本）
 ※2語目はmajesteit、3語目はmajoor。



図版6 『訳鍵』63ウ左（家蔵本）
 ※2～5語目はそれぞれgejeukt・ge-ijkt・ge-ijlt・ge-ijzelt。

この「…」によるわかりにくさは、UとVについても時折見られる。もっとも、IとJの表記法とは少し異なる。以下にその例を挙げる（106才右、図版7）。

- KAU.鴉
 KAValie.舊汚ノ舟。敵穢。
 …el.闌
 …elen.同上ニテ分ツ
 …iaard.塩鯨ノ名
 …uris.印度ノ寶貝。貨ニ代テ用ル具。
 …uw.鴉。咬碎ノ物。多食ス。

UとVの場合、IとJとは異なり、三文字目がvからuに変わるタイミングで「…」から「…」に変更し、uを書くことによってuに変わったことを示すことが大半である。しかし、逆に言えば、それに気づかなければ正しい綴りを思い浮かべることができないということでもある。また、本来は「…」であるはずなのに「…」となっていたり、逆に「…」であるべきところが「…」になってしまっているところもあるので、結局はハルマ2版などを参照せざるを得なくなる。実際、上の例の最後の語は「…uw」となっているように見えるが、ハルマ2版を参照するとKAUWとなっているので、「…uw。」が正しい。

上の例とはまた違う形でわかりにくくなっている箇所もある。以下は21ウ左の例である（図版8）。

- Bevinden.考出ス。見出ス。探出ス。
 …ukelaar.兎。龜甲。
 (8語略)
 …uling.女帽 豕腸ニ肉ヲ填タルモノ。
 …loeren.石ヲ布ク
 …ulschap.罪人ヲ司ル吏

この場合、最初のBevindenの三文字目がvで、次の語の三文字目がuに変わるので、「…」ではなく「…」にしているのであるが、下から2語目で「…」にすることで三文字目がvに戻りbevloerenであることを示そうとしている。しかし、「…」を一つ増やすことでvに戻ったことを示すのには無理がある。これも極めてわかりにくい措置と言わざるを得ない。

KAU.	鴉
KAValie.	舊汚ノ舟。敵穢。
…el.	闌
…elen.	同上ニテ分ツ
…iaard.	塩鯨ノ名
…uris.	印度ノ寶貝。貨ニ代テ用ル具。
…uw.	鴉。咬碎ノ物。多食ス。

図版7 『訳鍵』106才右（家蔵本）

※6語目はkauris、7語目はkauw。

Bevinden.	考出ス。見出ス。探出ス。
…ukelaar.	兎。龜甲。
…uken.	敵ノ穢
…ukery.	ノ名
…ukhamer.	鉄鉞
…vl.	罪人ノ擲打ス。
…vlakken.	汚ル
…vlekker.	同上
…ulytigen.	勉強
…ulin.	罪人ノ女帽
…uling.	肉ヲ填タルモノノ豕腸
…loeren.	石ヲ布ク
…ulschap.	罪人ヲ司ル吏

図版8 『訳鍵』21ウ左（家蔵本）

※下から3語目はbeuling、2語目はbevloeren、一番下の語はbeulschap。

6.3. 『訳鍵』における「一」による省略表記

『訳鍵』には「一」による省略もあるので、ここで触れておく。これも『訳鍵』独自の省略表記である。

「一」による省略は、すぐ上の見出し語全体がその「一」に当てはまることが多い。大抵は上の語と合わせてイディオムを示す場合に用いられる。

図版9で言えば、2語目はeigen lof、3語目はeigen manであるが、4語目でeigenaarになることがややわかりにくいかもしれない。このように使われるので、「一」とその次の語の間には一字空白が入るのが通例であるが、そのことがわかりにくい箇所もある。図版10で「…」により省略されているのはkanで、1語目はkandyであるが、2語目の「一」は次のsyroopに近づき過ぎているので、空白が入るのかどうか不安になる。ハルマ2版を見るとKandy-stroop.とあるので、「一」の後にハイフンかスペースを入れるべき箇所のようにも思われる。(stroopはsyroopと同義。ちなみに、最終行の「一」はハイフンでkan-lukである。)

このように、「一」による省略も、不審なところは結局ハルマ2版などを参照しなければならなくなる。

6.4. 『訳鍵』におけるIjとYの書き分け

ijとyについて、『訳鍵』は基本的に『波留麻和解』と同じ扱いをしているが、『波留麻和解』と同様、『訳鍵』でもハルマ2版でijとなっている語をyで綴る箇所がいくつか見られる。以下にそれを挙げる。(なお、「…」はそこに入るべきアルファベットに直して引用した。)

- aflyfig. 没命 (次の語はafloopなのでijの位置。ハルマ2版はAFLIJVIG。『波留麻和解』も「aflijvig. byv.没命」。)
- afryden. 騎下ル (次の語はafrossenなのでijの位置。ハルマ2版はAFRIJDEN。『波留麻和解』も「afrijden, g.w.馬ニテ乗下ル」。)
- afstygen. 下馬 (次の語はafstoffenなのでijの位置。ハルマ2版はAFSTIJGEN。『波留麻和解』も「afstijgen. g.w.馬ヨリ下ル」。)
- afvylen. 用鑪 (次の語はafvillenなのでijの位置。ハルマ2版はAFVIJLEN。『波留麻和解』も「afvijlen. w.w.ヤスリヲカケル」。)
- afwyzen. 難言 (次の語はafwoleyenなのでijの位置。ハルマ2版はAFWIJZEN。『波留麻和解』も「afwijzen, w.w.言カネル」。)

EIGen.	私ノ固自 我性有己。
— lof .	自慢
— man .	我夫
...enaar .	主
.. enaardig .	性質

図版9 『訳鍵』 52ウ左 (家蔵本)
※2語目はeigen lof。4語目はeigenaar。

...dy.	冰糖
—fytoop.	糖蜜
...eelwafel.	餅 元煎 糖和 煎
...efas.	元煎 糖和 煎 粗布
...ker.	乳岩 種
...—luk.	彝酒 壞底

図版10 『訳鍵』 104ウ左 (家蔵本)
※「…」で省略されているのはkan。2語目はkandy syroopか。

- ・afzypelen.漉。滴。(次の語はafzoenenなのでijの位置。ハルマ2版はAFZIJPELEN。『波留麻和解』も「afzijpelen.漉ス。又滴ル。」)

上記の変更は全て『訳鍵』で新たに施されたものである。afで始まる語だけでこれだけ集まるので、『訳鍵』独自の変更も相当な数にのぼると見られる。これら以外にも、『波留麻和解』での変更をそのまま引き継いでいる箇所がある。(前掲の例で言えば、『訳鍵』のaanbeyen. aanblyven. accyskamer. ARTykel.のyは、『波留麻和解』での変更を引き継いでいる。)

一方『訳鍵』では、上の例とは逆に、ハルマ2版でyと綴られている箇所をijに変更しているところも、少数ではあるが存在する。それらのうち、見出しの見出し語順に齟齬を来している箇所を挙げれば以下の通りである。

- ・geluijerd.倦怠シタ (前の語はgelurktなのでyの位置。ハルマ2版はGELUYERD。『波留麻和解』も「geluyerd. d.w.怠倦シタ」)
- ・spoeijen.進行 (前の語はspoelwielなのでyの位置。ハルマ2版はSPOEYEN。『波留麻和解』も「spoeyen.進行ク」)
- ・stoeijen.戯ル (前の語はstoeteryなのでyの位置。ハルマ2版はSTOEYEN。『波留麻和解』も「stoeyen.戯ル」)
- ・voeijeren.衣ニ裡ツケル (前の語はvoetzoolなのでyの位置。ハルマ2版はVOEYEREN。『波留麻和解』も「voeyeren.衣裏」)

親見出し・子見出しの区別がされていない『訳鍵』で、これほどij→yやy→ijの変更をされると、現代の我々が利用する際に戸惑う箇所も多くなる。以下のような例はその最たるものである(56オ左下~右上、図版11)。

FIGuur.圖

…uurlyk.譬喩

FYMelen.底意ノ知ヌ。急ニ果サヌ。

FYN.精粹。信神。粉末。

…igheid.純粹。神ニ敬事ス。底意ノ知ヌ。

…schilder.細画スル人

FIKfakkery.急ニ果サヌ



図版11 『訳鍵』56オ(家蔵本)

この箇所ではFIG…とFIK…の間にFYM…とFYN…が入っており、事情を知らない人が見たら混乱しそうな見出し語順になってしまっている。このFYM…とFYN…は、本来ならFIIm…およびFIIn…としてほしいところであるが、オランダ語ではijを大文字で記す際にYを用いることがあるので、このようにしてしまったのであろう。(ハルマ2版はFijmelen・FIIN、『波留麻和解』はfijmelen・fijnとなっている。) このように綴られるのは二箇所のみで(もう一箇所は42オのDIG…→DYK…→DYN…→DIK…), その他はIJで綴られるが、これら二箇所については『増補改正訳鍵』にも引き継がれてしまっている(66オ・50オ)。

7. 『和蘭字彙』の見出し語配列

前述した通り、『和蘭字彙』はI・J・U・Vを分けて配列し、IJは一律にYとして扱っている。他の蘭日辞書とは異なり、ハルマ2版の例文や例句も多く取り入れているが、それらの字下げは行うのに対し、ハルマ2版が行っている親見出し・子見出しの区別は取らず、単語の見出しは一様に字下げしないという方針を取っている。すなわち、現代の辞書に近い配列方式となっているため、現代の我々には最も引きやすい辞書になっている（図版12）。

ただ、細かく見ていくと、ハルマ2版の親見出し・子見出しの区別を付けなかったために、アルファベット順が徹底されていない箇所が残っている。先に示したeeten以下の箇所について、字下げされている例文や例句を除いて示すと、eeten. eetenstijd. eeter. eetkamer. eetkosten. eetlust. eetmaat. eetster. eettafel. eetplaats. eetwaaren. eetzaal.といった具合である。（E9ウ～10オ、ここではyではなくijで翻字した。）やはりeetplaatsはアルファベット順の位置にないと感じるが、この箇所については他の蘭日辞書と同様、ハルマ2版の子見出しの配列順をそのまま継承しているためこのようになっている。

<i>vermaandelijck. bijr. n. met grootc eer.</i>	格闘小 格闘小	
<i>Hij milt alom vermaandelijck ont.</i>	格闘小 格闘小	
<i>vangen.</i>	格闘小	
<i>verzaam. bijr. n. die vermaandelijck.</i>		
<i>versluct. s. v. versluctighid.</i>	格闘小	
<i>versluctig. bijr. n. versluctig.</i>	格闘小	
<i>Ein versluctig gemoed.</i>	格闘小	
<i>versluctighid. die versluctig.</i>	格闘小	
<i>versuil. s. m.</i>	格闘小	
E E S. E E T.		
<i>est. s. m. de plaats alwaar de brae.</i>	格闘小	
<i>mes sijn moet broogen.</i>	格闘小	
<i>etbaar. bijr. n. dat geyeten kan worden.</i>	格闘小	
<i>een.</i>		
<i>Das is geen etbaare kost.</i>	格闘小	
<i>eten. v. n.</i>	格闘小	
<i>Yesch, kisch, end. eten.</i>	格闘小	
<i>P. midtsags eten.</i>	格闘小	
<i>P. aronbs eten.</i>	格闘小	
<i>Mijn hie ut 's aronbs niet.</i>	格闘小	
<i>Yor den eten.</i>	格闘小	
<i>Het midtsags eten, het midtsag</i>	格闘小	
<i>maal.</i>		
<i>Het aronb eten, het aronbmaal.</i>	格闘小	
<i>Het eten. s. g. de spijde.</i>	格闘小	
<i>Het eten gered maken.</i>	格闘小	
<i>etenswijf</i>	格闘小	
<i>eter. s. m. die surk ut.</i>	格闘小	
<i>Hij is een surk of groot eten.</i>	格闘小	
<i>eetkamer. die eetzaal.</i>		
<i>ekosten. die vermaaren.</i>		
<i>eetlust. s. v. gaagheid.</i>	格闘小	
<i>eetmaat. s. v. biet.</i>	格闘小	
<i>eetster. s. v.</i>	格闘小	
<i>eetafel. s. v.</i>	格闘小	
<i>eetplaats. die eetzaal.</i>		
<i>etwaaren. s. v. muer. abra geyet.</i>	格闘小	
<i>ten morb.</i>		
<i>Daer verkoopt men alwerhande</i>	格闘小	
<i>vermaaren.</i>		
<i>De vermaaren sijn diir.</i>	格闘小	
<i>eetzaal. s. v.</i>	格闘小	
E E U.		
<i>uier, uime. s. v. de tijd van hon.</i>	格闘小	
<i>bed jaaren.</i>		
<i>Na verloop van ene uime.</i>	格闘小	
<i>uimig. in de philosophische nauw.</i>	格闘小	
<i>keuzighid. bijr. n. dat begin neg</i>		
<i>uind heyt.</i>		
<i>uimig. dat geen uind heyt.</i>	格闘小	
<i>*uimig. zwelng, steeds</i>	格闘小	
<i>Ach! vesp hij, zal ik uimig</i>	格闘小	
<i>klaagen, en uimig ongelukkig</i>	格闘小	
<i>zijn?</i>	格闘小	
<i>Ter uimiger gebagenijge.</i>	格闘小	
<i>Men heyt dat heid der uimiger</i>	格闘小	
<i>gebagenijge van den Koning of,</i>	格闘小	
<i>gerigt.</i>		
<i>uimigduisend. bijr. n. dat altoos</i>	格闘小	

図版12 『和蘭字彙』E9ウ～10オ（杉本つとむ1974、早稲田大学出版部影印より）

※三字見出しがあることはハルマ2版と同じであるが、親見出しと子見出しの分け方は異なる。ハルマ2版の分け方は取らず、単語の見出しと例文・例句とで分けているので、現代の辞書の表記法に近い。

8. 『増補改正訳鍵』の見出し語配列

8.1. 『増補改正訳鍵』における増補・改正の方法

『増補改正訳鍵』が『和蘭字彙』を用いて『訳鍵』を増補・改正していることについては、編者の広田憲寛が自序に書いている。以下に句読点を補って引用する。

舊本譯鍵ハ冠履ノ取除有ヲ以テ、初學ノ者詞ノ不足ヲ患ヘ、和蘭字彙ノ如キハ全備ノ書ナリト雖トモ、貧生ノ又恐レナキコト不能。爰ニ於テ舊本ヲ増補スルニ和蘭字彙ヲ拠トシ、字性ヲ加ヘ辞ヲ益シテ、初心ノ學者ニ便リス。

『増補改正訳鍵』の本文を『訳鍵』や『和蘭字彙』の本文と対照させてみても、『増補改正訳鍵』は実際この通りに編纂されていると感じる。基本的に『訳鍵』の見出し語および訳語をベースに『和蘭字彙』で増補しているのであって、その逆ではなかったと見られる。

その理由はいくつかあるが、一つには、『訳鍵』由来の訳語と『和蘭字彙』由来の訳語の両方が含まれる見出し語において、その訳語群の前半が『訳鍵』の訳語と一致し、後半が『和蘭字彙』の訳語と一致することの多い点が挙げられる。また、部分的には『和蘭字彙』の見出し語順が続く箇所はあっても、見出し語の最初三文字については『訳鍵』の分け方を踏襲しており、全体としては『訳鍵』の見出し語の並びの中に『和蘭字彙』の見出し語を挿入している傾向が見られることも理由として挙げられる。しかし、前に述べた通り、『増補改正訳鍵』はIとJ、UとVについて、部をそれぞれに分けている。

ならば配列順はどうなっているのかというと、所々『和蘭字彙』の配列方法にしようとしている姿勢は窺えるものの、結果的には「場所によって異なる」と言わざるを得ない状況になってしまっている。以下、その配列方法について検証する。

8.2. 『増補改正訳鍵』におけるUとVの配列方法

まずUとVの配列方法についてであるが、これについては見出し語の最初三文字の大文字に着目して分析することにする。『訳鍵』ではUとVが区別されずに配列されるので、最初の三文字にUやVがあれば、場所によっては両者が混ざり合って出現することになるが、『和蘭字彙』の配列方法にすれば、両者は必ず分離されてU→Vの順で配列されるはずである。勿論、綴りによってはUしか出ない箇所やVしか出ない箇所があるが、そういった箇所は除き、UとVとで混ざり合う可能性のある箇所のみを取り上げて分析した。

表1にその結果を記す。大文字で書かれている最初の三文字がどの順番で出てきているかを示し、左端に判定の記号を記した。UとVが分けて配列されていてU→Vの順になっている箇所は「○」、UとVが混ざって配列されている箇所は「×」、UとVが分けて配列されているがV→Uの順になっている箇所は「△」を付した。『訳鍵』についても同様の判定を示し、『増補改正訳鍵』が独自に正しく配列を変更している箇所には網掛けを施した。

『訳鍵』でたまたま最初からUとVが分離してU→Vとなっている箇所もあるので、そういっ

た箇所を除くと、『増補改正訳鍵』が独自に正しく『和蘭字彙』の配列方法に変更したと見られるのは、網掛けのかかっている箇所に留まる。それ以外のところは『訳鍵』の配列のままになってしまっており、配列方法の変更について徹底されていないことが表1からわかる。

表1 『増補改正訳鍵』の見出し語の最初三文字におけるUとVの配列方法変更の検証

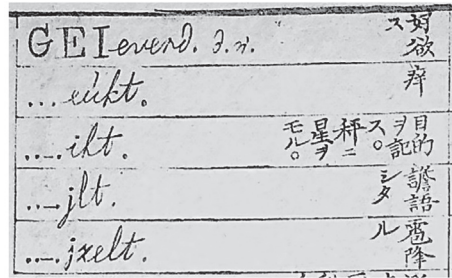
『訳鍵』(1810年刊)	『増補改正訳鍵』(1857-60年刊)
×A <u>V</u> A→A <u>V</u> E→A <u>U</u> G→A <u>V</u> O→A <u>T</u> (10オ)	○A <u>U</u> G→A <u>T</u> →A <u>V</u> A→A <u>V</u> E→A <u>V</u> O(13オ)
×B <u>E</u> U→B <u>E</u> V(21オ～22オ) ※B <u>E</u> Vの中にbeuあり	○B <u>E</u> U→B <u>E</u> V(25オ～26オ)
△B <u>O</u> V→B <u>O</u> U(29ウ～30オ)	○B <u>O</u> U→B <u>O</u> V(36ウ～37オ)
△D <u>A</u> V→D <u>A</u> U(40オ)	△D <u>A</u> V→D <u>A</u> U(47ウ)
×D <u>E</u> U→D <u>E</u> V→D <u>E</u> U(41オ)	×D <u>E</u> U→D <u>E</u> V→D <u>E</u> U(49オ)
○E <u>E</u> U→E <u>E</u> V(52オ)	○E <u>E</u> U→E <u>E</u> V(61ウ)
△E <u>V</u> E→E <u>U</u> N→E <u>U</u> V(54ウ～55オ)	△E <u>V</u> E→E <u>U</u> N→E <u>U</u> V(64ウ～65オ)
△G <u>A</u> V→G <u>A</u> U(60オ)	△G <u>A</u> V→G <u>A</u> U(70オ)
×G <u>E</u> U(73ウ～74ウ) ※G <u>E</u> Vの中にgeuあり	○G <u>E</u> U→G <u>E</u> V(88オ～89オ)
△H <u>A</u> V→H <u>A</u> U(85ウ)	△H <u>A</u> V→H <u>A</u> U(101オ～ウ)
×H <u>E</u> V→H <u>E</u> U→H <u>E</u> V→H <u>E</u> U(89オ～ウ)	○H <u>E</u> U→H <u>E</u> V(106オ)
×H <u>O</u> U→H <u>O</u> V→H <u>O</u> U(94オ～95オ)	○H <u>O</u> U→H <u>O</u> V(111ウ～112オ、113オ ¹¹)
×K <u>A</u> U→K <u>A</u> V(106オ) ※K <u>A</u> Vの中にkauあり	○K <u>A</u> U→K <u>A</u> V(126オ～ウ)
△K <u>E</u> V→K <u>E</u> U(108オ～ウ)	△K <u>E</u> V→K <u>E</u> U(128ウ～129オ)
×L <u>A</u> V→L <u>A</u> U→L <u>A</u> V(126オ～ウ)	×L <u>A</u> V→L <u>A</u> U→L <u>A</u> V(150オ)
△L <u>E</u> V→L <u>E</u> U(129オ～ウ)	△L <u>E</u> V→L <u>E</u> U(153ウ～154オ)
△L <u>O</u> V→L <u>O</u> U(134ウ)	△L <u>O</u> V→L <u>O</u> U(159オ)
○M <u>E</u> U→M <u>E</u> V(144オ)	○M <u>E</u> U→M <u>E</u> V(169ウ)
△N <u>E</u> V→N <u>E</u> U(157オ)	△N <u>E</u> V→N <u>E</u> U(185ウ～186オ)
×O <u>U</u> D→O <u>V</u> →O <u>V</u> E→O <u>T</u> →O <u>U</u> W(174ウ～178ウ)	×O <u>U</u> D→O <u>V</u> A→O <u>V</u> E→O <u>T</u> →O <u>U</u> W(228ウ～234ウ)
△P <u>A</u> V→P <u>A</u> U(181オ)	△P <u>A</u> V→P <u>A</u> U(237ウ)
△R <u>A</u> V→R <u>A</u> U(195オ)	△R <u>A</u> V→R <u>A</u> U(252ウ)
×R <u>E</u> U→R <u>E</u> V→R <u>E</u> U(197ウ) ※R <u>E</u> Vの中にreuあり	○R <u>E</u> U→R <u>E</u> V(255ウ～256オ)
×R <u>O</u> U→R <u>O</u> V→R <u>O</u> U(202ウ)	△R <u>O</u> V→R <u>O</u> U(260オ～ウ)
×S <u>A</u> (204オ～ウ) ※S <u>A</u> の中がsau→sav→sau	○S <u>A</u> U→S <u>A</u> V(263ウ～264オ)
△S <u>E</u> (212ウ) ※S <u>E</u> の中seven.→seulen.の2語のみ	△S <u>E</u> V→S <u>E</u> U(275オ)
△T <u>E</u> (232ウ～233オ) ※T <u>E</u> の中がtev→teu	△T <u>E</u> V→T <u>E</u> U(303オ)
△T <u>O</u> V→T <u>O</u> U(236オ)	△T <u>O</u> V→T <u>O</u> V→T <u>O</u> U(308ウ～309オ)
△Z <u>E</u> V→Z <u>E</u> U(289オ)	○Z <u>E</u> U→Z <u>E</u> V(389ウ)

8.3. 『増補改正訳鍵』におけるIとJの配列方法

IとJについても同様にして分析を行うが、U・Vとは少々異なる事情がある。それは、UとVの場合、『訳鍵』においては最初の三文字においてU→VやV→Uに変わる際には逐一最初の三文字を書き改める傾向があるのに対し、IとJでは書き改めない傾向がある。例えば、UとVの場合はDEU→DEV→DEUというように記しなおすが、IとJの場合は、例えば最初がBEJであって途中でbeiで始まる語があっても、そこは「…」で省略したままでBEIとは書かないという傾向がある。

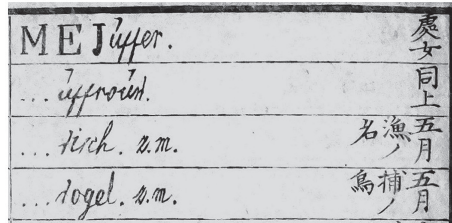
この表記のわかりにくさについては『訳鍵』のところで指摘したが、『増補改正訳鍵』の編者もそれに気づいておらず、実際は「…」の中でiからjに、あるいはjからi変更されるべき箇所も、『訳鍵』の通りに「…」と書いている箇所がある(図版13・14)。

こういった箇所をどう捉えるかで結果は変わってくるのであるが、仮にこれは『訳鍵』の問題であって、『増補改正訳鍵』の過失ではないと捉えて判断した結果が表2である。(もし上記の点も『増補改正訳鍵』の過失に含めるとすれば、「MEI→MEJ」の「○」は「×」になる。)それでもやはり、『訳鍵』の配列方法のままとなってしまう箇所があることは否めない。



図版13 『増補改正訳鍵』
75ウ左(家蔵本)

※2～5語目はそれぞれgejeukt・ge-ijkt・ge-ijlt・ge-ijzelt。



図版14 『増補改正訳鍵』
167ウ右(家蔵本)

※2語目はmejuffrouw。3・4語目はmeivisch・meivogel。

表2 『増補改正訳鍵』の見出し語の最初三文字におけるIとJの配列方法変更の検証

『訳鍵』(1810年刊)	『増補改正訳鍵』(1857-60年刊)
×BEJ(15ウ) ※BEJの中にbeiあり	○BEI→BEJ(18ウ)
×GEJ→GEI(63オ～ウ) ※GEIの中にgejあり	△GEJ→GEI(75オ～ウ) ※GEIの中にgejあり
×MAI(138オ) ※MAIの中がMAI→maj	○MAI→MAJ(163オ)
×MEI(141ウ～142オ) ※MEIの中にmejあり	○MEI→MEJ(167ウ) ※MEJの中にmeiあり
×NAJ(154オ) ※NAJの中にnaiあり	○NAI→NAJ(181ウ)
×SI(212ウ～213オ) ※SIの中がsi→sj→si	×SIB→SIC→SID→SIG→SIK→SIL→SIM→SIN →SIO→SIP→SIR→SIS→SJA→SJO→SIT(275オ)
×TJA→TIB→TJC(TICの誤)→TIE(TJEの誤、tieを含む)→TIG→TIJ→TIK→TIL→TIM→TIN →TIP→TIR→TIT(233オ～ウ)	×TJA→TIB→TJC(TICの誤)→TJE→TIE→TIG→TIK→TIL→TIM→TIN→TIP→TIR→TIT(303ウ～304オ)

8.4. 『増補改正訳鍵』におけるIJとYの配列方法

以上のように、UとVやIとJでは、『和蘭字彙』のように区別して配列しようとする箇所とそうでない箇所の両方が見られたのであるが、IJとYについてはどうであろうか。

IJとYについてもやはり、Yとして扱う配列方法が徹底されてはいるとは言えない状況なのであるが、U・VやI・Jに比べれば分布の傾向のようなものが見られる。

U・V、I・Jと同様に最初の三文字で分析してみると、二・三文字目がIJまたはYになるもののうち、『増補改正訳鍵』にはCIJ、HIJ、KIJ、LIJ(ただしLIIと誤る)、MIJ、NIJから始まる見出し語が依然として存在しており、それらはいずれもIJの位置にある。すなわち、それらは『訳鍵』の配列方法がそのまま残ってしまっている箇所であり、『和蘭字彙』の配列順に合わせるのなら、それぞれCY、HYなどと綴って全てYの位置に置かなければならない。また、それらに加え、『訳鍵』のところで指摘した、本来はDIJであるべきDY(DYK・DYN)と、本来はFIJであるべきFY(FYM・FYN)がある。それらはYで表記されてはいるが、位置はIJの位置にあるので、上記のCIJやHIJと同様、『訳鍵』の配列方法が残ってしまった箇所であると言える。(なお、BIJとGIJから始まる見出し語は『増補改正訳鍵』に無いので、その二つについては『和蘭字彙』と同様にBYやGYに入れていることになる。また、AIJ・EIJ・IJ・JIJはもともと『訳鍵』に存在せず、『増補改正訳鍵』にも存在しない。)

U・VやI・Jと異なるのは、そのように二・三文字目がIJの語を『訳鍵』の配列方法のままにしているのはNの部までで、それ以降では全てYの位置に移している点である。つまり、二・三文字目がIJまたはYになるものについては、Nより前の部分では(BY・GYを除いて)『訳鍵』の配列のままになっているのに対し、Oより後の部分(OIJはもともとハルマ2版に無いので、実際にはPより後の部分)においてはきちんと『和蘭字彙』の配列方法に修正しているということである。このことは、U・VやI・Jにおける『和蘭字彙』の配列方法が、『増補改正訳鍵』全巻を通してまばらに出現するのとやや異なる点であると言える。

8.5. 『増補改正訳鍵』Iの部末尾にあるIJから始まる語の不自然な位置について

『増補改正訳鍵』で最も奇妙な配列となってしまうのは、Iの部の末尾にある、IJから始まる語の47語である(119ウ～120オ、図版15)。IVO…から始まる語が3語続いた後、IJK…→IJL…→IJS…→IJZ…と続いて行くのであるが、IJの綴りであれば114オのIK…の前に入るべきであるし、そもそも『増補改正訳鍵』は『和蘭字彙』の部の分け方にしようとしているので、これらはYの部に入れるべき語である。

どうしてこのようなことをしているのか。明確な理由は断じられないが、このIの部やJの部を編纂・版行している時点で『和蘭字彙』のYの部がまだ刊行されておらず、それにより『増補改正訳鍵』もYの部はまだ完成していなかったはずなので、そのことと関係して生じている現象であることは想像がつく。本稿では詳述しないが、国立国会図書館蔵の旧幕府引継書『市中取締続類集』に『増補改正訳鍵』の売り広め願いの記事が残されており¹²、そ

8.6. 『増補改正訳鍵』における4文字目以降のijまたはyの扱いについて

それならば4文字目以降のijまたはyの配列方法はどうかというのと、『増補改正訳鍵』はその点においてもやはり、やや無頓着であったように感じられる。

ijやyの綴り自体はAの部に何度も出て来るのであるが、『訳鍵』の見出し語の並びの中に『和蘭字彙』から語が増補されていて、なおかつij（またはy）が出て来るところに着目してみると、以下のように、ijの位置としてもyの位置としてもおかしいところが散見される。

『訳鍵』2才右

aanroepen.拜ム。願フ。言フ。

aanroeren.抵ル。顕ス。論ス。達ス。

aanruiken.嗅ク

aanrukken.強引

『増補改正訳鍵』2ウ右

aanroepen. w.w.拜ム。願フ。言フ。

aanroeren. w.w.抵ル。言顕。論ス。衝當ル。觸ル。書顕ハス。

aanroeijen. g.w.楫ヲ強クカク

aanroelen. w.w.轉シヤル

aanruiken. w.w.嗅ク

aanrijden. g.w.馳来。馬ニテ馳行。乗り来。

aanrukken. w.w.強ク引ク

ここでは、『増補改正訳鍵』の3・4・6語目が『和蘭字彙』から増補されている見出し語なのであるが、3語目のaanroeijen、6語目のaanrijdenのij（またはy）が、ijと解してもyと解しても、前後の語とのアルファベット順に矛盾が生じる。（なお、『増補改正訳鍵』は頭文字の三文字以外、小文字の筆記体で記されているので、『和蘭字彙』と同様、ijなのかyなのかを字の形から見分けることができないが、ここではijで翻字した。）

実は4語目のaanroelenは、『和蘭字彙』でaanrollenとなっているので、そのようにすれば問題ないのであるが、6語目のaanrijdenについては、どのように考えても挿入する位置が悪いと言わざるを得ない。こういった例が『増補改正訳鍵』全体に散見される。

前に見たように、ハルマ2版の子見出しは厳密なアルファベット順になっていないことがあるため、もともと『訳鍵』のアルファベット順に齟齬のある場合があるのであるが、このように、『和蘭字彙』から語を増補する際に適切な位置に挿入していないため、『増補改正訳鍵』ではさらにアルファベット順の崩れている箇所が増えているものと見られる。

9. まとめ

近世の刊本蘭日辞書はいずれも、現代のアルファベット引き辞書とは異なり、見出し語が必ずしもアルファベット順通りに並んでいるとは限らない。長崎ハルマ系統の『和蘭字彙』は現代の辞書の配列方法に近いが、江戸ハルマ系統の蘭日辞書に関しては、現代の辞書とは異なる検索システムを持つハルマ2版の見出し語配列方法が取られていた。ハルマ2版の見出し語配列方法を受け継いだ『波留麻和解』は、その検索システムを知ってさえいればまだ引きやすいのであるが、親見出し・子見出しの区別を無くして独自の略記法を取り入れた『訳鍵』、さらに、『訳鍵』の配列方法と表記方法を残しながら『和蘭字彙』の配列方法を中途半端に取り入れた『増補改正訳鍵』と、後になればなるほど見出し語の配列は乱れていった。

このことについて日本の辞書史を遡って考えてみると、『和名類聚抄』や『色葉字類抄』に始まる日本のイロハ引き辞書は、古来より頭文字のみをイロハで分類し、その下位分類は意義分類にすることが大半であった。近世期には『蘭例節用集』という著作も作られたが、それすらイロハ順になっているのは二文字目までで、それ以下は意義分類になっていた。そのことから考えるに、近世までの日本人にとって、見出し語の最初から最後までをイロハ順やアルファベット順に並べなければならないという意識は、総じて現代よりも低かったと言える。つまり、近世の蘭学者たちは、見出し語をアルファベット順に並べることに對して現代ほど厳密さを追求しなかったものと想像されるのである。

ただ、それならばこれらの辞書は現代の我々にとって全く引けない辞書なのかと言えば、決してそうではない。IとJ、UとV、IJとYの関係について知ってさえいれば大抵の語は探し出すことができ、また、多少配列順が乱れていたとしても、半丁程度の中で収まっている乱れであれば視界の中に入って来るので、大抵は見つけられる。その場合は、アルファベット順が乱れていること自体にすら気づかないことがほとんどであろう。

筆者はこの十年ほど、『波留麻和解』・『訳鍵』・『増補改正訳鍵』・『和蘭字彙』の電子テキスト化に取り組んできた。現時点でほぼ完成しており、本稿もその成果を利用して執筆している。(ただし、『和蘭字彙』については日本語部分のみの電子テキスト化とした。)この成果が公開されれば、以降はオランダ語を介することなく、これらの辞書に含まれている訳語を簡単に直接検索できるようになる。しかし、そのことによりオランダ語から検索することが少なくなり、本稿で論じたような問題がさらに気づかれにくくなることも予想される。本稿は、上記の刊本蘭日辞書について、オランダ語も含めて電子テキスト化する際に気づいたことの一部をまとめたものであるが、その作業をしなければ気づかなかったことが大半である。恐らく辞書というものは、利用者側にとってみれば、探している言葉が見つけれさえすれば、多少の見出し語配列の乱れなどほとんど気にならないものなのであろう。

参考文献

- 石橋重吉1938 『若越新文化史』(安田書店1978年復刻による)
 森陸彦1965 「幕府諸機関の記録に現れた「和蘭字彙」の出版経過」『蘭学資料研究会研究報告』175
 杉本つとむ1974 『和蘭字彙』早稲田大学出版部
 杉本つとむ1978 『江戸時代蘭語学の成立とその展開Ⅲ』早稲田大学出版部
 松田清1984,86 「『ドゥーフ・ハルマ』初稿の翻刻ならびに『和蘭字彙』ハルマ『蘭仏辞典』との訳語対照」『海南手帖』2,3
 石川光庸・河崎靖詠1999 B.C.ドナルドソン著『オランダ語誌』現代書館
 櫻井豪人2011 「『英和対訳袖珍辞書』初版草稿の諸相と蘭書の利用」『日本語の研究』7-3

注

- 『増補改正訳鍵』の刊年について。通常は見返しにある「安政丁巳」を取って「安政四1857年刊」とするところであるが、本稿では論旨の展開上、最終冊である第五冊の刊行年として万延元(1860)年説を取り、「安政四～万延元1857-60年刊」としておく。後に見る『市中取締続類集』の記述により、文久元(1861)年三月に売り広め願いを出していることがわかるため、それ以前に刊本が出来ていたことは確実であるが、石橋重吉1938には「萬延元年六月(中略)同年十二月増補改正譯鍵刊刻成りたるに付全部五巻献上す」とある(p.73)。この記述の根拠が現段階では未詳であるが、『市中取締続類集』記載の売り広め願いの時期に照らし合わせて信頼に足る記述と判断し、万延元年十二月までに全五冊が出来たものと考えておく。なお、『和蘭字彙』の刊年についても同様に、『市中取締続類集』および『開版見改元帳 二』の記述に従い、「安政二～五1855-58年刊」としておく。これについては森陸彦1965に詳細な研究がある。
- 本研究において使用した資料は、ハルマ2版・『訳鍵』・『増補改正訳鍵』が家蔵本、『波留麻和解』が東京大学総合図書館蔵本(F. Halma: *Nederduits Woordenboek*、請求記号A100:1348)、『和蘭字彙』が杉本つとむ1974の影印である。刊本の『波留麻和解』の現存諸本には、東大総図本の他、早稲田大学図書館洋学文庫蔵本、静嘉堂文庫蔵本、千葉県立佐倉高等学校鹿山文庫蔵本のあることが知られているが、東大総図本・早大本が江戸版で初版、静嘉堂本・佐倉本が関西版で再版とされている。東大総図本と早大本とでは訳語の共通している部分が多いが、特に早大本の最初の方には『ドゥーフ・ハルマ』によって増補されたと思われる訳語が多く存在する。従って、現存諸本の中で最も古い形態を残しているのは東大総図本であるものと見られる。
- このあたりのことについては、石川光庸・河崎靖詠1999参照(p.68以降)。
- 『和蘭字彙』のオランダ語は全て筆記体で記されているため、bijeと綴っているのかbyeと綴っているのかを字の形から見分けることができない。これは、yの上に「 $\bar{\cdot}$ 」があるからij、無いからyといった単純な話ではない。実際、『和蘭字彙』において小文字筆記体のyの上には全て「 $\bar{\cdot}$ 」があるが、配列はyの位置にある。
- この呼び方は決まったものではなく、本稿で便宜上そのように呼ぶに過ぎない。「親見出し」「子見出し」の用語は日本の国語辞典の用語を流用したものであり、また「三字見出し」というのも本稿における仮称である。
- 『波留麻和解』はアルファベット・匡郭・罫線・丁付けが木活字による印刷で、訳語部分は墨書による手写である。東大総図本・早大本の中には時折ウムラウトのついた「ë」が見られるが、大抵は「e」と捉えるべきものである。恐らくは、「ë」の活字も一応作ったものの、組版される際に「e」

と区別されずに用いられたものと見られる。

- 7 反対に、ハルマ2版でyと綴られているところがijに変更されて、見た目の見出し語順に齟齬を来しているような箇所は見当たらなかった。
- 8 『訳鍵』の附録(『凡例附録訳鍵』)の凡例に、「「マーリン」。「ハンノット」。其他ノ書ニ見ル所ノ辞。偶ハルマニ漏脱シタル者ヲ補入ス」とある(3オ)。
- 9 例えば、SCHで始まる語やUITで始まる語など。『訳鍵』では見開き左上の語、すなわち各裏丁の最初の語は「…」を使わず、全ての綴りを大文字から始めて記すという原則があるのであるが、結果的にはそれが徹底されておらず、見開きの最初の語が「…」から始まっているために、「…」で何の文字が省略されているのかを調べるのに手間がかかるような箇所が時折見られる。
- 10 もっとも、『波留麻和解』にはハイフンが入っていないので、『訳鍵』がハルマ2版、もしくは他のオランダ語辞書を参照して綴りを示していることは間違いない。
- 11 『増補改正訳鍵』の112オ右の枠外上部に「hov.誤テhui.ノ文字ノ跡ニ入ル。」と書かれており、実際、HOV…は本来HOUの後に入らなければならないのにHUIの後に入っている。これは、『訳鍵』でHOU…とHOV…が混在して配列しているものを分けて配列しようとしたがゆえの編集上のミスであったものと見られる。
- 12 『市中取締続類集』書物之部三ノ四の三十七「安政四巳年十月／向方相談廻／豊臣勲功記賣弘願調」の中の「繪本豊臣勲功記外六品賣弘願奉伺候書付」、および同書物之部五ノ中の十一「文久元酉年四月／向方相談廻／永年吉事録外壱品賣弘願之儀ニ付調」の中の「四書纂要外貳品賣弘願奉伺候書付」。

付記 本稿はJSPS科研費「電子テキスト化による刊本蘭日辞書の研究とその訳語の研究」(基盤研究(C)、課題番号26370526)の助成による研究成果の一部である。